

わすれられないよるごはん

平澤 柚奈

わたしは、よくおかあさんに、おてがみをかきます。それは、なぜかというと、おうちのことやかぞくのこと、おしごとのことなどたいへんなおかあさんに、わらってほしいからです。おてがみをわたすと、

「えーゆなちゃんありがとう！」
といつてよるこんでわらってくれます。そんなおかあさんに、ありがとうとおもったひがありました。

それは、おとうとと、きょうだいげんかをしたときです。おかあさんは、わたしにおこりました。わたしは、くやしくておこって、ベッドのへやにとじこまりました。おかあさんは、

「よるごはんになつたらきてね。」
といました。わたしは、よるごはんなんて、たべたくありませんでした。おかあさんなんていいや、とおもいました。すこしじかんがたつておかあさんが、

「もうよるごはんだよ。」
とよびにきました。わたしは、

「いかない！たべない！こないで！」
といました。おかあさんは、ざんねんそうに、おへやをでていきました。わたしは、いろんなことをかんがえて、おふとんにかおをうずめてきました。すると、おかあさんがまたよびにきました。

「せつかくごはんつくったのに。ごはんたべないの？」
といました。わたしはおこって、

「あつちいつて。」

といました。おかあさんは、しずかにもどっていききました。かぞくがごはんをたべはじめました。おへやからはなしごえがきこえてきました。わたしはだんだん、みんなのところにもどりたくなつて、どうやつてもどればいいかかんがえました。ほんとうは、もどりたいのに、あやまりたいのに、かぞくのまえにいくのが、はずかしくてなかなかごめんなさいがいえませんでした。わたしは、ゆうきをだして、すこしずつみんなのほうに、あるきました。

「ごめんなさい。」

ちいさなこえでいうと、

「いいからはやくたべな」

と、おかあさんは、いいました。テーブルをみると、なみだがあふれてきました。テーブルのうえには、いつもとちがうわたしがだいすきな、とくべつなメニューがおいでありました。おかあさんが、

「ゆなちゃんのためにつくったんだよ。」

と、わらっていいました。どんななみだがあふれて、おかあさんにだきつきました。このときのことをおもいだすと、いまでもなきそうになります。いつもおかあさんは、わたしのため、かぞくのためにみんながよろこぶことをしてくれまます。そんなおかあさんがだいすきです。いつも、おかあさんありがとう。